

(3) 本戦略の位置付け

生物多様性を守るためには、様々な分野との連携が重要です。そのため、江東区では、生物多様性に関する他の計画や取組と内容の整合を図る必要があります。また、最新の手引きやガイドライン、東京都や他の22区が策定している地域戦略等と連携することで、今の社会の流れに合った、江東区にふさわしい計画づくりを目指しています。

「(仮称)江東区生物多様性地域戦略」が、上位の計画や関連する法律・条例、各種手引き等とどのように関係しているかを図1-11に整理しました。

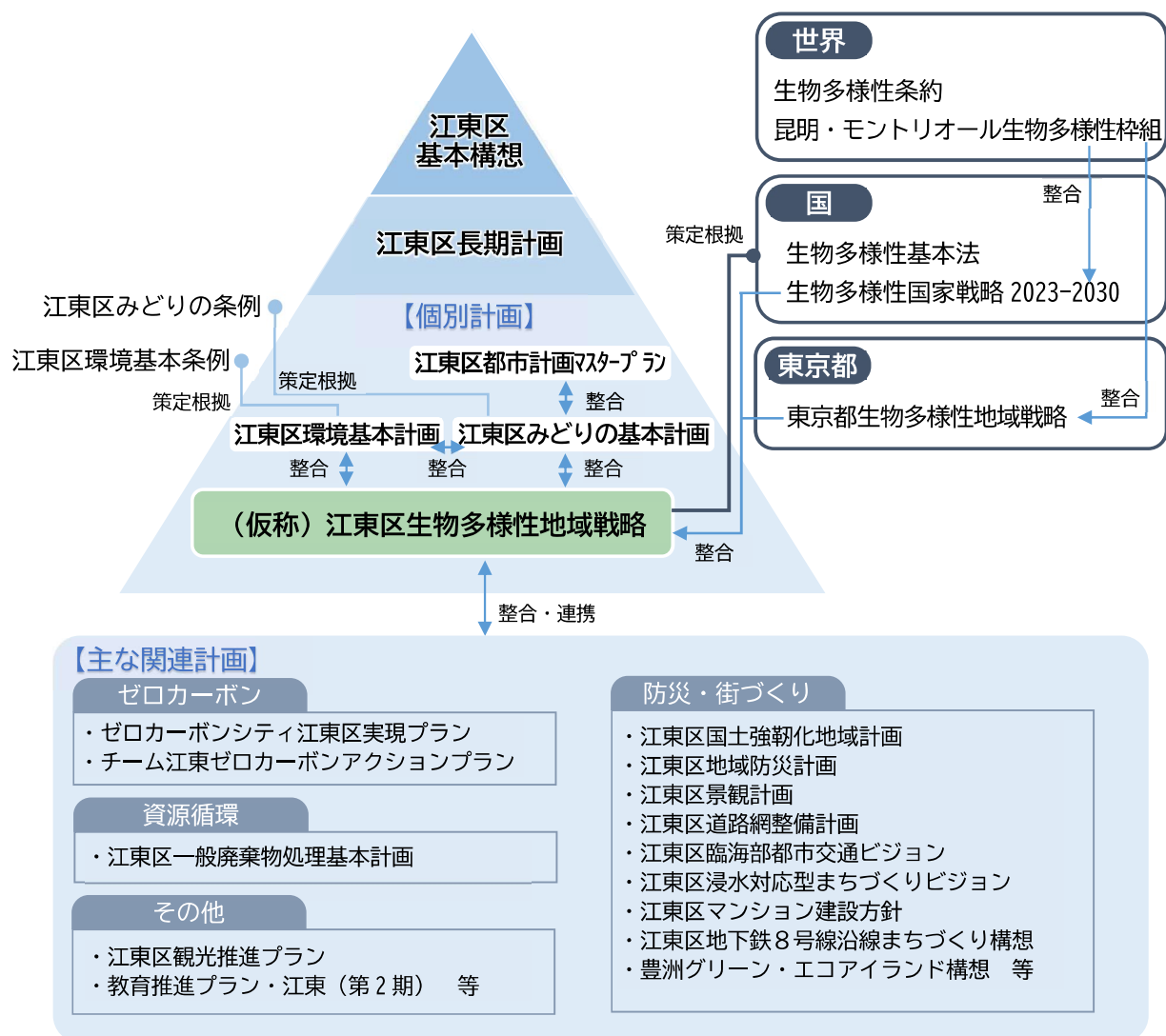


図 1-11 関連計画や手引き等における江東区生物多様性地域戦略の位置付け

(4) 戦略の対象地域

「(仮称)江東区生物多様性地域戦略」の対象地域は、江東区全体です。海については、陸とつながっている海岸線の水際までを対象とします。ただし、対象地域の外であっても、生物多様性の保全に関わる重要なことがあれば、周辺の区や東京都、国の機関等と協力しながら取組を進めていきます。

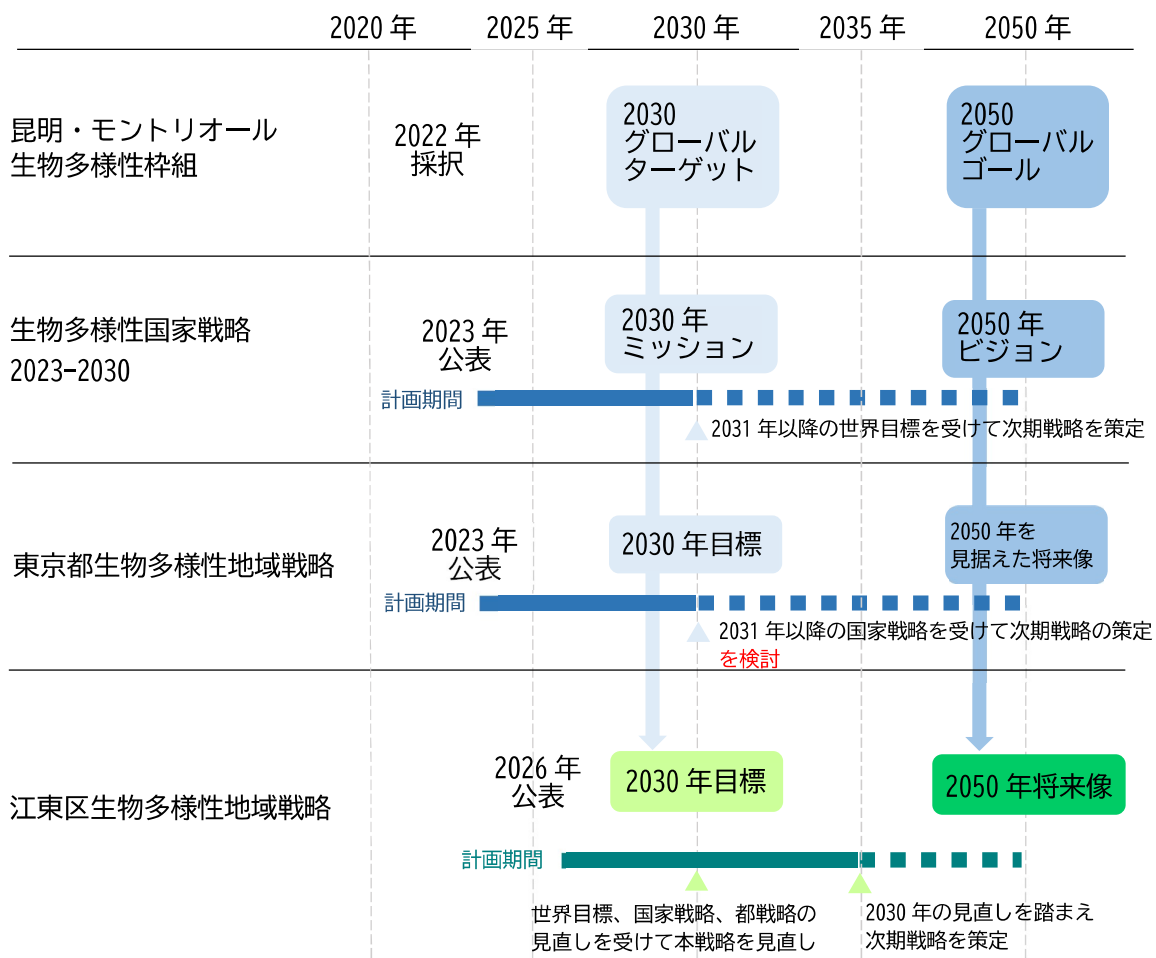
(5) 戦略の計画期間及び目標年

この戦略は、世界や国、東京都が進めている生物多様性の取組と歩調を合わせて進めることを目指しています。

国の「生物多様性国家戦略 2023-2030」では、令和 32 (2050) 年を中長期的な目標年、令和 12 (2030) 年を短期的な目標年としています。江東区でもこれに合わせて、次のように目標年を定めています。

- ・令和 32 (2050) 年の将来像：江東区が目指す生物多様性のあるべき姿
- ・令和 12 (2030) 年の目標： **ネイチャーポジティブの実現**

このため、江東区の戦略の計画期間は、令和 8 (2026) 年度から令和 17 (2035) 年度までの 10 年間としています。また、短期的な目標年である 2030 年以降は、世界や国、東京都の各計画の改定を踏まえ、江東区の戦略も見直していく予定です。





第2章

江東区の生物多様性

- 1 江東区の地理的特徴と生態系
- 2 江東区における生態系サービスの利用
- 3 江東区における生物多様性の現状と課題



第2章の色 わすれなぐさ ー勿忘草

勿忘草の花の色に由来する、春の空気を感じさせる優しい色です。

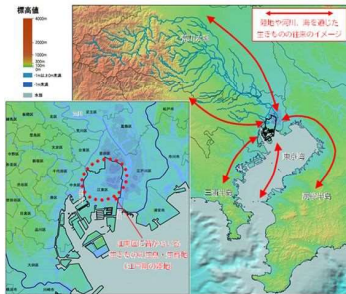
◆表紙の生きもの ーヌマチチブー

第2章の概要

1 江東区の地理的特徴と生態系 p. 25～

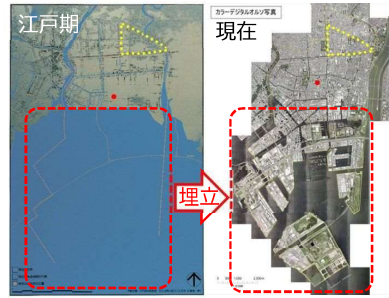
◆ 地形と位置

江東区は東京湾に面するとともに荒川、隅田川に囲まれた低地であり陸地や河川、海を通じて生きものが往来します。



◆ 土地利用の変遷

江戸期は湿地や干潟が広がり農業や漁業、木材業が盛んでしたが、明治期以降は埋立により工業化・宅地化が進みました。



◆ 生物相の概況

区内には多様な水辺や緑地が広がり、2,500種以上の生きものが確認されています。一方、人間活動の影響等で外来種も確認されています。



2 江東区における生態系サービスの利用 p. 34～

◆ 供給サービス

江戸期では、江戸前の「食」である深川めしや江戸東京野菜等の恵みを受けてきました。現代では、食材等のほとんどを区外に依存しています。



◆ 文化的サービス

現代では、花文化や区民農園（農体験）、釣り等があり、江戸期には潮干狩りも盛んに行われていました。区内には、フジやハギ等花の名所が数多くあります。



◆ 調整サービス

ヒートアイランドの緩和や大気汚染・騒音の低減、水質浄化、水害の低減、延焼防止等、様々な自然の働きによって区民の暮らしが守られています。

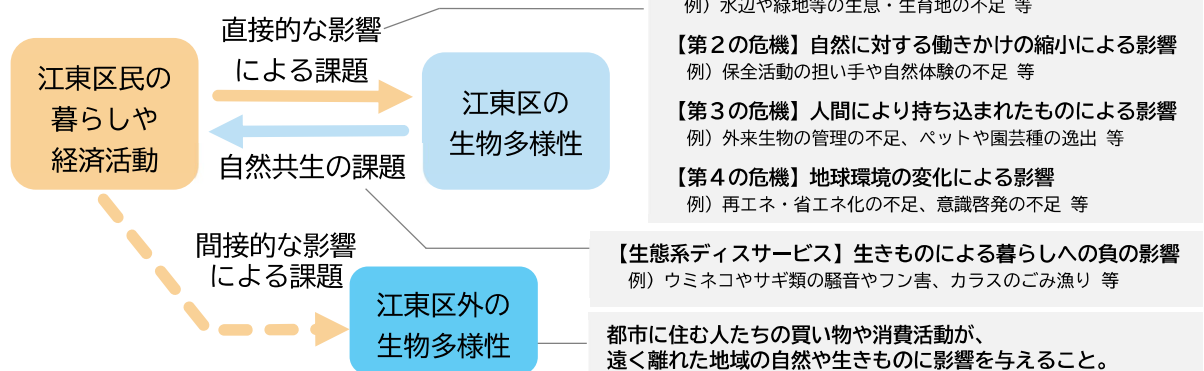


◆ 基盤サービス

区内にあるポケットエコスペースや公園、河川・運河、干潟等の緑地や水辺は、生きものの生息・生育地を提供し、江東区の生態系を形作り、各生態系サービスを支える土台となっています。

3 江東区における生物多様性の現状と課題 p. 40～

江東区では、昔から多くの自然の恵みを受けてきましたが、今では様々な原因によって区の生物多様性が危機にさらされていると同時に、生きものによる負の影響もあります。これらの生物多様性の現状と課題を様々な視点から整理しました。



第2章 江東区の生物多様性

本章では、江東区の現状に合った戦略の策定に向けて、江東区の現状と課題を整理していきます。

1 江東区の地理的特徴と生態系

(1) 江東区の地形と位置

江東区は、南側が東京湾に面し、東側に荒川、西側に隅田川が流れる低い土地に位置しています。南側には、埋立地が広く広がっているのも特徴です。

荒川と隅田川といった大きな河川は、様々な生きものが暮らす場所として重要な役割を果たしています。江東区はこれらの河川の下流から河口にかけての地域にあるため、河川の増水時には上流から生きものや栄養分が流れてきます。また魚類が上流へ向かう際に通る場所にもなっています。

また、江東区は江戸川区、墨田区、中央区、港区、品川区、大田区と隣接しており、東京湾にも広く面しています。東京湾には神奈川県三浦半島や千葉県房総半島も含まれているため、周辺の地域から陸地や河川、海を通じて生きものが行き来することで、多様な生きものの生息・生育地となっています（図 2-1）。

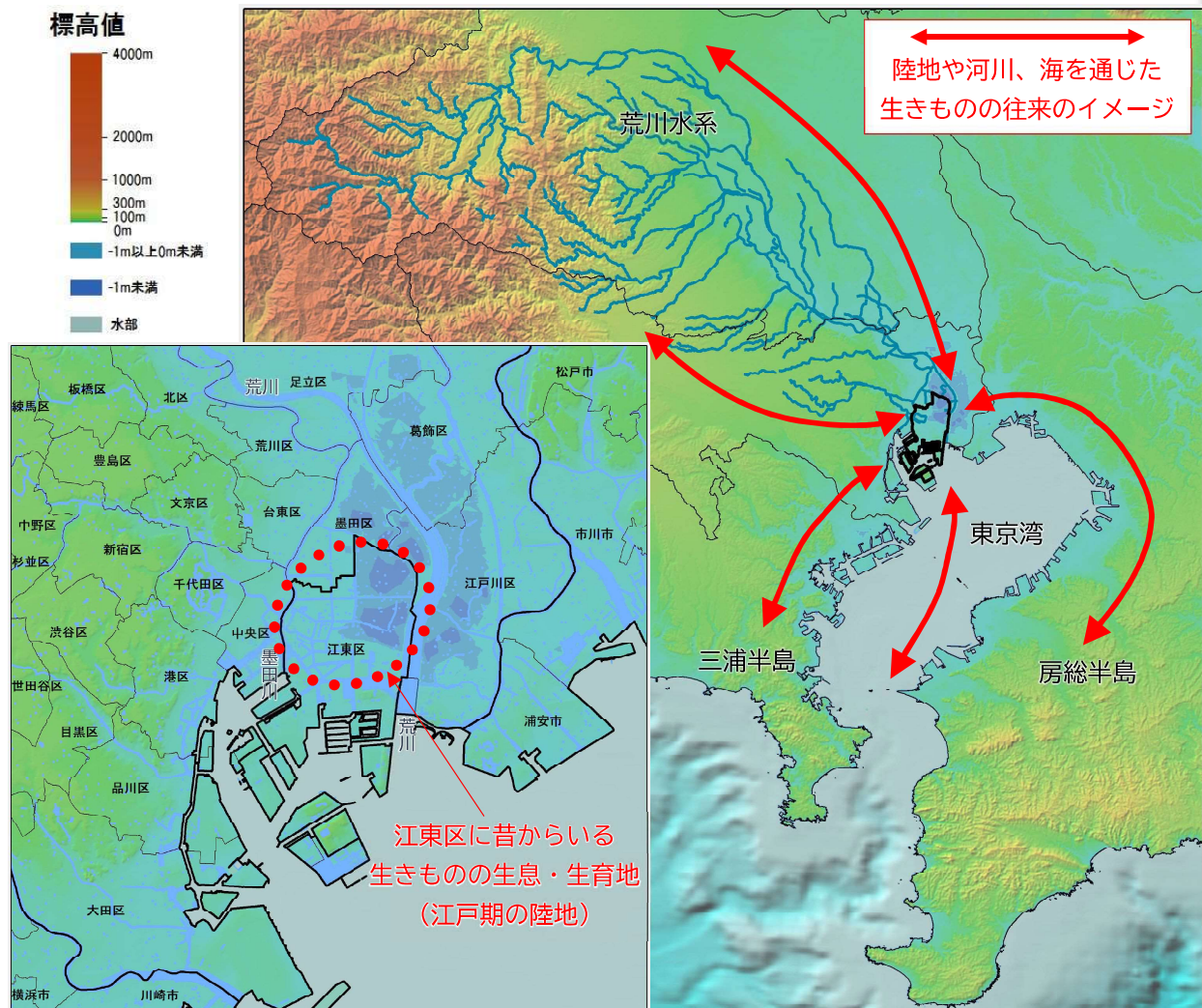


図 2-1 水辺と緑地を活かしたエコロジカルネットワーク

【出典】国土地理院「色別標高図」・「基盤地図情報 GIS データ」、国土交通省「国土数値情報 GIS データ」より江東区作成

(2) 江東区の変遷

1) 土地利用

江東区では、江戸期から現在にかけて、土地の使われ方が大きく変わってきました。



【江戸後期→明治初期】文化元年→明治9年
(1804年→1876年)

江戸期の開発が始まる前は、江東区のほとんどが干潟や湿地でしたが、既に陸地化していた亀戸付近に人が住む集落がありました。江戸前期には、現在の森下辺りで土地の開発が始まり、深川村が誕生しました。

深川地区では、寛永6(1629)年に「深川狝師町」が誕生し、漁業が盛んに行われました。深川浦(現在の永代、佐賀あたりの南側で大横川の一部)では、内湾沿岸漁業と干潟での採貝・採藻業が組み合わせられ、鰻、手長海老、牡蠣等の貝類、スッポン等が名産として知られるほどに生きものが豊富に生息していました。これらの旬で新鮮な魚介類は、深川めしをはじめとする「江戸前」の食文化を形成しました。

明暦3(1657)年の「明暦の大火」をきっかけに、焼け跡の土や江戸の町のごみが深川永代浦周辺(現在の富岡八幡宮付近)に運ばれ、埋め立てが進みました。

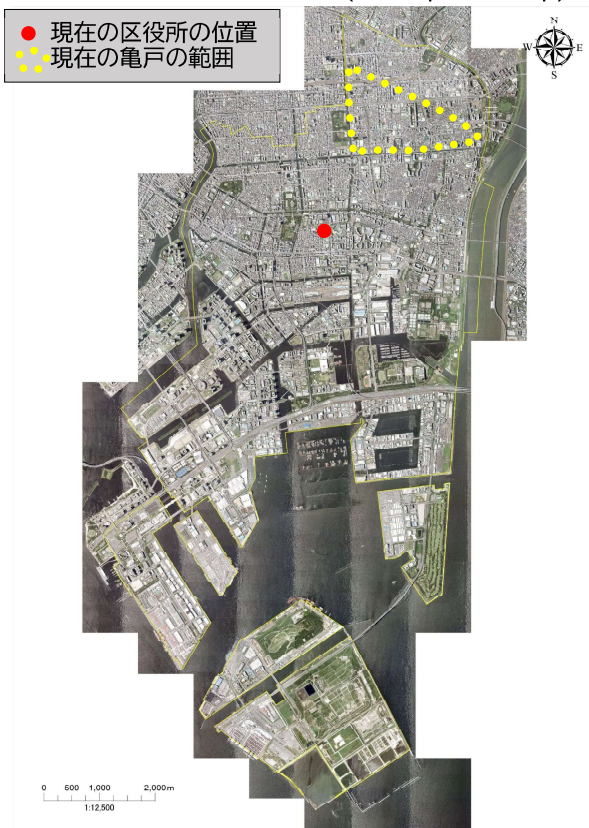
その後、深川地区は、河川を利用した木材や倉庫の仕事、米や油を扱う商人の町、江戸の人々が遊びに訪れる場所として発展しました。一方、城東地区では、江戸の近郊に位置する農地として、国内発祥として知られる「野菜の促成栽培(加温や保温を行い、通常の収穫時期より早く作物を育てて出荷する栽培方法)」が進められた他、畑では今でいう「江戸東京野菜」等の農産物が盛んにつくられていました。このように、かつては生態系の恵みをふんだんに利用していたことが伺えます。

【出典】江戸後期→明治初期の地図：江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)

錦絵：国立国会図書館ウェブサイト「錦絵でたのしむ江戸の名所」(<https://www.ndl.go.jp/landmarks/>)



【明治中期→大正中期】 明治10年→大正11年
(1877年→1922年)



【現在】 令和4(2022)年

【出典】 明治中期→大正中期の地図：江東区「まちの記憶と未来展」(令和7(2025)7月)

現在の地図：江東区「江東区みどりの実態調査報告書」(令和5(2023)年3月)

明治期の中ごろから、近代化の進展により、江東区の土地の使われ方は大きく変わりました。周辺では、水路を使った船の交通が発達し、工業地域として発展しました。

しかし、地下水のくみ上げや天然ガスの採取が進んだことで、明治の終わり頃(明治43(1910)年前後)から地面が沈み始め、昭和の初めから昭和45(1970)年代にかけては、地盤沈下が深刻な問題となりました。

さらに、工場からの汚れた水や家庭からの排水が河川や水路に流れ込んだことで、水質が悪くなり、多くの生きものが住めなくなっていました。

地下水や天然ガスのくみ上げに対する規制や、公害を防ぐための様々な対策が進められた結果、昭和48(1973)年以降、地盤沈下は次第におさまってきました。

昭和53(1978)年からは、江東区が河川を再び活かすために「親水公園事業」に取り組み、自然を取り戻すための工夫が始まりました。例えば、地震に強い護岸が整備された河川では、木を植える等して、水辺の景観を良くする取組が行われています。

現在では、かつて広がっていた農地や自然の干潟・湿地のほとんどが失われ、江東区の面積の約6割が住宅地や公共施設、企業や工場、道路・鉄道等、人の暮らしに関わる空間になっています。

2) 水害と街づくり

荒川の下流域に広がる江東区では、水辺に囲まれた地域の安全を守るために、様々な対策を進めてきました（表 2-1、図 2-2）。一方で、洪水による強い水の流れや土砂の移動といった攪乱^{かくらん}がおさえられて、河川から土や栄養が運ばれたり、生きものが暮らす多様な環境が生まれたりといった自然の大切な働きが失われることがあります。こうした現象は、生物多様性を守るうえで重要な意味を持つため、良い面、悪い面があることもしっかりと考える必要があります。

表 2-1 水害と街づくりの整備内容

整備メニュー	整備内容
外郭堤防と水門の整備	荒川、隅田川、東京湾に囲まれた江東三角地帯を高潮から守る堤防・水門の整備
区内部の河川の整備	地盤沈下対策のかさ上げ工事により脆弱化した護岸を地震水害から守る河川整備
下水道の整備	豪雨に対応するための浸水対策としての下水道（合流式）を整備
災害に強い都市基盤整備	雨水幹線やポンプ所、調整池、公共施設・民間建物の雨水貯留・浸透施設の設置
耐震・耐水対策事業	堤防・水門等の補強、揺れや液状化対策の鉄筋補強・地盤改良、電気設備の耐水化

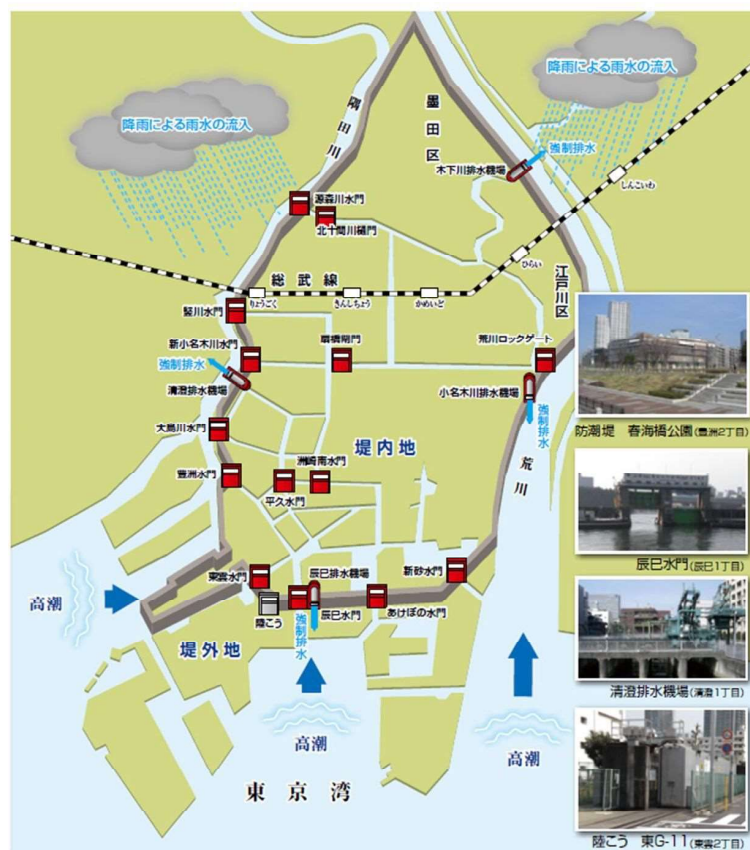


図 2-2 江東区の外郭堤防と水門の整備

【出典】江東区「まちの記憶と未来展」（令和 7（2025）7 月）

コラム 水彩都市の充実

水彩都市・江東区には水辺に親しむことができる整備が多く見られます。

開放感ある、一体整備された河川と道路・公園

憩い空間と安全な遊歩道や自転車も通行可能な散策路の機能を備えた空間を創出し、周辺環境と連携した地域の活性化や、街全体の更なる魅力の向上を図ります。

また、荒川や旧中川の高水敷は、水辺に親しめる公園として整備されています。

歩行者・自転車・公園利用者が共存し、安全で快適な親水公園



▲詳しくはこちら

治水・利水の使命を終えた区内部の河川は、江東区の貴重なオープンスペースとして親水公園が整備されています。

また、自然のままの川の水を導水しているため、魚類などの水生生物が多く見られます。

水辺と緑地に親しめる水辺・潮風の散歩道

河川の耐震護岸や運河の内部護岸上を、水と緑のネットワークづくりの一環として、水辺に親しめる、みどり豊かな散歩道として整備しています。



【出典】江東区「まちの記憶と未来展」（令和7（2025）7月）

コラム 松尾芭蕉と深川

松尾芭蕉は、延宝8（1680）年、俳句の活動に専念するために日本橋から深川に移り住み、約14年間、深川の草庵（芭蕉が住んでいた小屋）を拠点に活動しました。

深川への移住をきっかけに、「蕉風と呼ばれるような芭蕉独自の俳句の世界をつくり「古池や蛙飛びこむ水の音」等多くの名句や『多くのほそ道』等の紀行文を残しました。

深川の草庵は、はじめ「泊船堂」といいましたが、門人の送ったバショウの株がよく茂り、人々は「芭蕉庵」と呼ぶようになりました。深川で詠んだ芭蕉の句には、様々な生きものが登場することから、当時の江東区にあった自然や風景等の生物多様性は、芭蕉の俳句活動に大きな影響をもたらした、と言えます。

◇芭蕉が深川で詠んだ、生きものが登場する句◇

「古池や蛙飛びこむ水の音」「蓑（みの）虫（むし）の音を聞に来よ草の庵」

「深川の末、五本松といふ所に舟をさして、

川上とこの川下や月の友」 等



「芭蕉庵」【江戸名所図会】
天保7年（1836）

頭巾をかぶった句を練る芭蕉。庭にはバショウの株・竹・飛石・古池が描かれる。



▲詳しくはこちら

【出典】江東区「まちの記憶と未来展」（令和7（2025）7月）

(3) 江東区内の生物相の概況

1) 江戸期以降の生きもの

江戸期の江東区やその周辺（現在の中央区、台東区、荒川区、江戸川区、葛飾区等）では、人々は海岸を埋め立てて住む場所を広げながら、様々な自然環境や生きものを生活に活かしてきました。

当時の動植物について記された文献には、ヒツジグサやテンジソウのように今でも変わらずに見られる生きものが記録されています（図 2-3、表 2-2）。江東区では当時から生きものを愛でる園芸文化が栄えていたことも大きな特徴の一つであり、これらは江戸期に持ち込まれたものの可能性もあります。

一方、中には現在の江東区では見られなくなった貴重な生きものがいたことも記録されています（表 2-2）。これらは、当時の干潟や湿地、水田、水辺、草地等の自然環境が豊かだったことを示していると考えられます。

江戸期以降、江東区では、戦争やその後の経済発展により、大きく環境を変えてきたことにより、多くの生きものが生息・生育するには困難な環境となった時期がありました。しかし、富岡八幡宮や清澄庭園等の環境の変化が少なかった場所に生き残った生きものや、再び集まった生きもの等、近年の河川整備や公園、ポケットエコスペース、企業緑地の整備、それらの場所にみられる樹林環境、河川環境、湿地環境等のネットワーク化により、荒川や墨田川、江東区周辺の区等から再び多くの生きものが侵入、定着していると考えられます。

また、江戸期に確認された種のうち、現代でも確認されている種は、ポケットエコスペースや企業緑地、新砂干潟等、規模が小さくとも自然度が高く水辺と陸地のエコトーンがある場所でも生息・生育していることから、これらの環境を創出・再生することで、江戸期にも見られた生きものや現在の東京都レッドデータブックでは絶滅危惧種とされている種が生息・生育できると考えられます。

一方で、コウノトリやトキ、マガンに代表される水田等を中心とした広大な湿地環境に生息する種は現在の江東区では見られていません。

江戸期の生きもの図譜①



江戸期の生きもの図譜②



図 2-3 現代でも見られる江戸期に生息・生育していた生きもの

【出典】 国立国会図書館ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」(<https://dl.ndl.go.jp/>)

表 2-2 江東区周辺^{※1}で江戸期に確認されている主な生きもの

項目	江戸期に記録が確認された種	
	現地調査（【現】と表記）・ 文献調査（【文】と表記）で確認された種	現地・文献調査で 確認されなかった種
植物	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒメミズワラビ（都立海の森公園/R2年【文】） ・デンジソウ（横十間川親水公園ポケットエコスペース/R5年【文】） ・ヒツジグサ（横十間川親水公園・潮見さざなみ公園ポケットエコスペース/R5年、再生の杜/H27年【文】） ・マツモ（再生の杜/H27年【文】） ・ヒルムシロ（木場千年の森【文】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・サンショウモ ・ムジナモ ・ワレモコウ ・シオクグ 等
哺乳類	生息地が江東区周辺と断定できる記録なし	<ul style="list-style-type: none"> ・ノウサギ ・ニホンイタチ ・キツネ 等
鳥類	<ul style="list-style-type: none"> ・オオヨシキリ（亀戸天神社/R6【現】） ・コヨシキリ（新砂干潟/H25【文】） ・カワセミ（仙台堀川公園等/R6【現】） ・シギ類、チドリ類（新砂干潟等/R6【現】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・コウノトリ ・トキ ・マガン 等
爬虫類	<ul style="list-style-type: none"> ・ニホンスッポン（横十間川親水公園、亀戸天神社等/R6【現】）、ニホンイシガメ^{※2} ・ニホンマムシ^{※2} 等	—
両生類	生息地が江東区周辺と断定できる記録なし	
陸上 昆虫類	<ul style="list-style-type: none"> ・スズムシ（都立海の森公園/H30年【文】） ・ヒガシキリギリス（都立海の森公園/H30年【文】） ・ヒグラシ（富岡八幡宮/H30年【文】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・クツワムシ ・ゲンジボタル 等
魚類	<ul style="list-style-type: none"> ・マコガレイ（都立若洲海浜公園海釣り施設等【文】） ・マゴチ（荒川河口付近/R2年、汐浜運河護岸/R5年【文】） ・ドジョウ類（木場千年の森、釜屋堀公園・東陽一丁目第一公園ポケットエコスペース/R5年【文】） ・ニホンウナギ^{※2} 等	<ul style="list-style-type: none"> ・アオギス ・シラウオ ・ナマズ 等
底生 動物	<ul style="list-style-type: none"> ・ヤマトシジミ（区立旧中川水辺公園、新砂干潟等 R6【現】） 等	<ul style="list-style-type: none"> ・ハマグリ 等

※1：参考文献で荒川区、江戸川区、葛飾区、江東区、墨田区、台東区、中央区、千代田区に記録があるもの
 ※2：有識者ヒアリングにて、近年確認があるもの

【出典】野村圭佑「江戸の自然誌『武江産物志』を読む」（平成14（2002）年11月、どうぶつ社出版）

東京府南葛飾郡 編纂「南葛飾郡誌」（昭和63（1998）年10月、千秋社出版）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「南葛飾郡誌：草野俊介（1923）：自然的環境-植物 植物目録（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；1）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「北東低地帯文化財総合調査報告 第1分冊（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；2）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

清田秀雄・沖田堇（NPO法人ネイチャーリーダー江東）「渡邊瞭（1981）：江東区南部の植物：植物目録（地域の過去文献に関するAPG分類による植物目録の作成；3）」（令和7（2025）年3月、ネイチャーリーダー江東）

第1章

第2章

第3章

第4章

第5章

資料編

2) 現代の生きもの

現在の江東区には、水辺や緑地が様々な場所に広がっており、それぞれの環境に応じて、2,500種以上の多様な生きものが暮らしており、100種近くの重要種も確認されています。江戸期に見られたような生きものをできる限り回復するとともに、現在、暮らしている生きものがこれ以上減少することのないように保全していく必要があります。

▶ビオトープ（ポケットエコスペース）や親水公園にある草地や湿地の生きもの

- ・水鳥（サギ類、カモ類、等）、小型鳥類
- ・湿地性植物（カワヂシャ、ミゾコウジュ等）
- ・昆虫類（バッタ類、トンボ類、チョウ類等）等



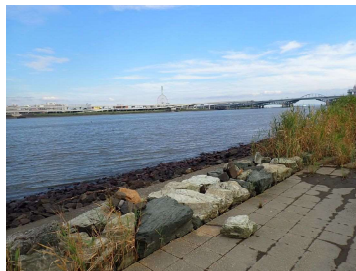
仙台堀川公園
ポケットエコスペース



シオカラトンボ
(仙台堀川公園ポケットエコスペース)

▶荒川・隅田川や中小河川、運河、池、親水公園等の河川の生きもの

- ・水鳥（アオサギ、カルガモ、ユリカモメ、カワセミ、ウミネコ等）
- ・両生類（ヒガシニホンアマガエル等）
- ・魚類（ハゼ類等）等



荒川



マハゼ（横十間川親水公園）

▶都立公園や緑道公園にあるまとまった樹林地や草地の生きもの

- ・猛禽類（ツミ、ノスリ等）
- ・小型鳥類（コゲラ等）
- ・爬虫類（ニホンカナヘビ、アオダイショウ等）
- ・樹林性昆虫類（ゴマダラチョウ等）等



都立亀戸中央公園



ツミ

(都立辰巳の森緑道公園)

▶荒川に造成された人工的な干潟「新砂干潟」や釣り場でもある人工磯の生きもの

- ・塩生植物（ウラギク、イセウキヤガラ等）
- ・水鳥（シギ・チドリ類）
- ・魚類（ハゼ類等）
- ・底生動物（カニ類、ゴカイ類、ヤドカリ類等）等



新砂干潟



キョウジョシギ
(豊洲ぐるり公園)

▶富岡八幡宮や亀戸天神社等歴史的な神社仏閣の生きもの

- ・ラン科植物（クゲヌマラン、キンラン等）
- ・爬虫類（ニホンスッポン、ニホンヤモリ等）等



富岡八幡宮



クゲヌマラン（富岡八幡宮）

一方で、人の活動によって持ち込まれたり、河川の上流から流れてきたりして、江東区には多くの外来種が入り込み、定着しています。植物では、東京湾の夢の島で初めて確認された「ユメノシマガヤツリ」等、外国から来た植物（帰化植物）が広く分布していることから、江東区は「帰化植物の宝庫」とも呼ばれています。

特に、生態系や人の暮らしに悪い影響を与えるおそれがある「特定外来生物」については、荒川沿いの「ナガエツルノゲイトウ」、区内全域で見られる「アライグマ」、青海ふ頭の「ヒアリ」、ポケットエコスペースにいる「アメリカザリガニ」、河川に棲む「ブルーギル」等、現地調査では10種、文献調査を含めると17種が確認されているため、これらの特定外来生物から元々の生態系を保全する取組も必要です（表 2-3）。

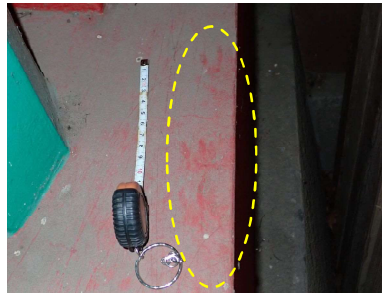
ブルーギル
（横十間川親水公園）アライグマの足跡
（富岡八幡宮）ナガエツルノゲイトウ
（旧中川水辺公園）

表 2-3 令和 6-7 年の動植物現地調査で確認された種数

分類群	確認種数			重要種	特定外来	備考
植物	52 目	136 科	696 種	26 種	3 種	17 地点の四季調査結果を示す。ただし、分類群によって地点や時期は異なる。
哺乳類	3 目	4 科	5 種	0 種	1 種	
鳥類	12 目	29 科	63 種	34 種	0 種	
爬虫類	2 目	6 科	6 種	4 種	1 種	
両生類	1 目	3 科	5 種	4 種	1 種	
陸上昆虫類	12 目	112 科	375 種	6 種	1 種	
魚類	6 目	12 科	26 種	5 種	2 種	
底生動物	16 目	44 科	68 種	13 種	1 種	
合計	104 目	346 科	1,244 種	92 種	10 種	

※重要種：環境省レッドリスト 2020、東京都レッドデータブック 2023 に掲載された希少種等の種数

特定外来：特定外来生物の種数

2 江東区における生態系サービスの利用

江東区では、昔から現在に至るまで、区内外、さらには世界中の自然環境や生きものから、様々な「生態系サービス（第1章で紹介した自然の恵みによる4つのサービス）」を受けて暮らしてきました。これらの恵みをこれからも受け続け、未来の世代にも引き継いでいくためには、自然の豊かさや生きもの多様性を守り続けることが大切です。

(1) 生存基盤としての恵み（基盤サービス）

私たちの暮らしを支える自然の働き（基盤サービス）には、生きものの棲みかを提供すること、酸素の供給、水や栄養分の循環、土壌の形成等があり、人間を含む全ての生きものつながりにとって欠かせないものです。これらは、他の三つの生態系サービス（食料や水等をもたらす供給サービス、自然との触れ合いを通じた文化的サービス、気候や水質を調整する調整サービス）を支える土台となっています。

江東区では、こうした自然の恵みが様々な場所で見られます。例えば、ポケットエコスペースや公園、河川・運河、干潟等の緑地や水辺では、それぞれに生きものが生息・生育しており、生態系が形作られています。このような多様な生態系が基盤となり、豊かな生態系サービスを支えています。

(2) 食料や資源をもたらす恵み（供給サービス）

食料や資源をもたらす自然の恵み（供給サービス）は、江戸期から「江戸前の食」や国内で生産された木材その他木材を通じて人々の暮らしを支えてきました（表 2-4）。しかし、現代では、食料自給率といった数値は低く、供給サービスの多くを区外に依存しているのが実態です。

表 2-4 江東区における代表的な供給サービスの例

時期	供給サービス	概要	主な生きもの
江戸期 〜 現代	江戸前の食 (深川めし (深川井))	漁業によるアサリやハマグリ等の貝類と、ネギ等の野菜を煮込んだ汁物をご飯にかけたり、一緒に炊き込んだりした料理は、漁師の食事がもとになっています。	アサリ ハマグリ 等
	江戸東京 野菜 (郷土料理・ 食材)	東京では江戸期から野菜づくりの文化が受け継がれてきました。昭和の中ごろまでは、地元で育てられた品種や、近くの種苗店から手に入れた種 <small>しゅひょう</small> を使って、昔ながらの方法で野菜が栽培されていました。	亀戸ダイコン 砂村三寸ニンジン 砂村一本ネギ 等
	木材 (木場と新木 場の貯木場)	江戸幕府は火事の心配が少なく、使いやすい場所として永代島（現在の富岡八幡宮から佐賀町にかけての一带）を材木置き場に選びました。その後、町の発展にともない、材木置き場は新木場へ移されました。	スギ・ヒノキ等の 利用に適した 樹種



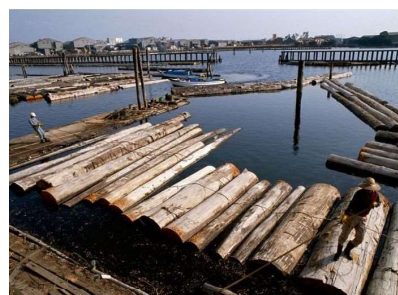
写真 2-1 深川めし

【出典】一般社団法人江東区観光協会ウェブサイト「江東おでかけ情報局「深川めし」」



写真 2-2 江戸東京野菜

【出典】公益財団法人江東区文化コミュニティ財団ウェブサイト「江東区中川船番所資料館「特別展「江戸の農業」関連講座」

写真 2-3 新木場の貯木場
(平成4(1992)年2月)

【出典】東京都ウェブサイト「東京アルバム「木場の貯木場(江東区)」」

コラム 江東区の食 ～深川めし・江戸東京野菜～

深川めしのルーツ

深川地区では、寛永6(1629)年に漁業集落「深川漁師町」が誕生し、将軍に魚を献上する役割も担っていました。深川浦(現在の永代、佐賀あたりの南側で大横川の一部)では、内湾沿岸漁業や干潟での採貝・採藻が盛んで、「きす」「ほうぼう」等多様な魚介類が水揚げされ、鰻や牡蠣等は名産として知られています。

これらの新鮮な魚介類を使って、まかない飯をつくったことが深川めしのルーツと考えられています。その後、郷土料理として定着し、江戸前の食文化を形成しました。

現代では、かつてのように漁獲量は多くなく、漁師町としてのにぎわいはなくなりましたが、近所の魚屋に並ぶスズキ等の江戸前の魚介類を手にし、生物多様性の恵みを味わってみてください。

亀戸大根

城東地区の砂村では、スイカやキュウリ等の野菜が栽培され、江戸の大消費地に供給する「江戸東京野菜」の産地として栄えました。キュウリは将軍への献上品とされ、亀戸では亀戸ダイコンが名産として知られています。

現代でも香取小学校や水神小学校等で亀戸ダイコンの栽培や香取神社への奉納(亀戸大根収穫祭)が行われ、伝統野菜の学習を通じて地域の農業文化が継承されています。

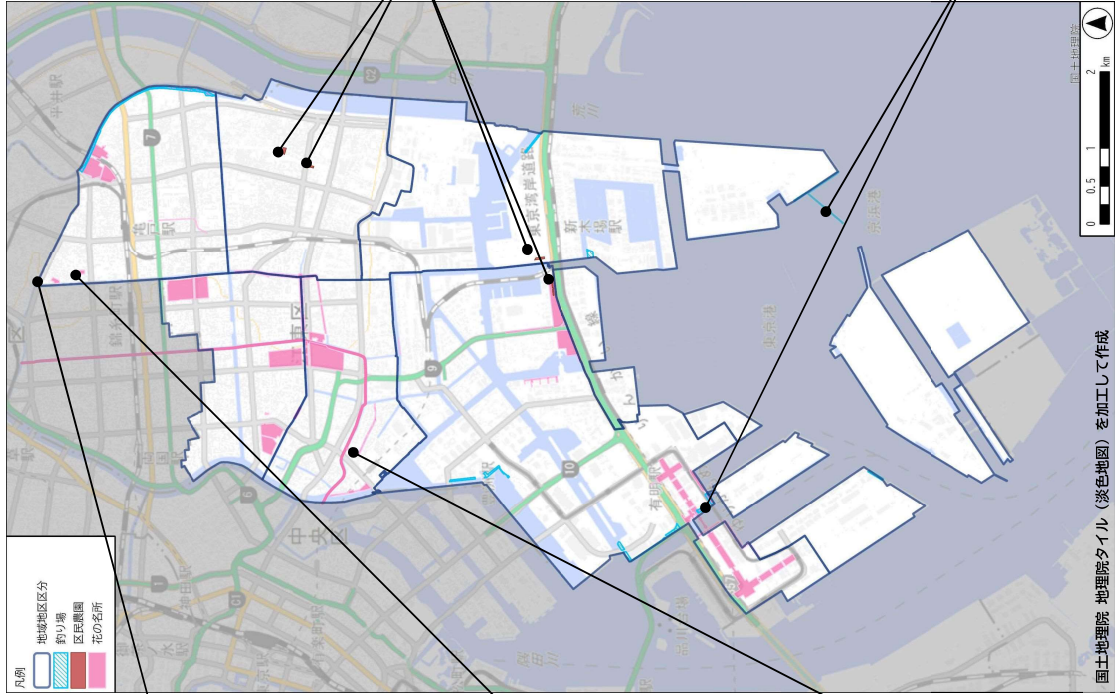


【出典】江戸東京・伝統野菜研究会 大竹道茂ウェブサイト「江戸東京野菜通信 令和4(202)2年3月14日記事」
(<http://edoyasai.sblo.jp/article/189395946.html>)

ています。

(3) 文化や歴史を育む恵み (文化的サービス)
江東区には、文化や歴史を育む自然の働き (文化的サービス) が数多くあります (図 2-4)。例えば、「花文化」や「区民農園 (農体験)」、「釣り」、「探鳥会」等があり、江戸期には「潮干狩り」も盛んに行われました。また、緑地や水辺は個人の創作や休息の場としても利用され

特に、江東区の花文化は「江戸園芸」として親しまれ、江戸期から現代まで受け継がれています。区内の神社仏閣、公園、庭園、緑道等には、四季折々の花や紅葉を楽しめる場所が点在しており、歴史と自然が調和した名所として多くの人々に親しまれています。



《花文化①》 龍眼寺「萩寺」



●ハギ：
通称「萩寺」として多くの文人墨客が訪れ「江戸名所図会」にも描かれた。9～10月に赤紫、白のハギが数百種開花する。

【出典】一般社団法人江東区観光協会ウェブサイト「江東おでかけ情報局」

《花文化②》 亀戸天神社 (亀戸天満宮)



●フジ：
歌川広重の「名所江戸百景」にも描かれた名所。4～5月には約100株のフジが開花し、「藤まつり」が開催される。

●ウメ：
菅原道真公が好んだとされる花。2～3月には300本以上の紅白のウメが開花し、「梅まつり」が開催される。

【出典】国立国会図書館ウェブサイト「絵巻でたのしむ江戸の名所」
【出典】一般社団法人江東区観光協会ウェブサイト「江東おでかけ情報局」

《花文化③》 古石場川親水公園「牡丹園」



●ボタン：
昔から栽培されていたことから「牡丹野」という地名がついたとされる。4～5月に紫、白、ピンクのボタンが約50種、約350株開花する。

【出典】一般社団法人江東区観光協会ウェブサイト「江東おでかけ情報局」

《探鳥会》 公園や河川等の緑地や水辺



●都立清澄庭園や都立猿江恩賜公園、荒川や中小河川等で水鳥 (カワセミ等) の野鳥を観察している。

●都立清澄庭園や都立猿江恩賜公園、荒川や中小河川で日本野鳥の会東京ウェブサイトを「清澄庭園探鳥会」

《区民農園》 辰巳、城東、夢の島、砂町

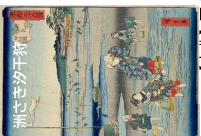


●区内4か所にある区民が手軽に野菜・草花づくりを楽しむことができる貸し農園。

砂町は2025年4月に開園。

【出典】夢の島区民農園ウェブサイト

《潮干狩り (江戸期)》 深川・洲崎周辺



●江戸庶民の磯遊びの一つである潮干狩りは3月の年中行事として深川洲崎等で見られ、洲崎弁天社周辺が特に名所であった。

アサリやハマグリ等が採れた。

【出典】国立国会図書館ウェブサイト「絵巻でたのしむ江戸の名所」

《釣り》 都立若洲海浜公園、都立水の広場公園等



●区内にある河川や運河、海上公園に整備されている人工磯や海釣り施設でスズキ (セイゴ) やカサゴ、メバル類、マハゼ等が釣れる。

【出典】東京港埠頭株式会社若洲海浜公園ウェブサイト「海上公園ナビ」

図 2-4 江東区における文化的サービス

(4) 安心・安全を支える恵み（調整サービス）

江東区では、様々な自然の働き（調整サービス）によって、私たちの暮らしが守られています（表 2-5）。例えば、ヒートアイランド現象（都市の気温が高くなる現象）をやわらげたり、二酸化炭素を吸収して地球温暖化を防いだりしています。また、雨水を地面にしみこませて貯めることで、水害のリスクを減らす役割もあります。

さらに、公園や広場等のオープンスペースは、災害時の避難場所として使える効果もあります。干潟や河川沿いの植物は、水をきれいにする働きもあり、私たちはこうした多くの自然の恵みを受けています。

表 2-5 江東区における代表的な調整サービスの例

調整サービス	代表的な効果	概要
気候の調整	気候変動の緩和	緑の温室効果ガスの吸収・貯留による地球温暖化の緩和
大気質や都市環境の質の改善	ヒートアイランドの緩和	緑による日射の遮断や蒸発散作業等によるヒートアイランド（都市部の気温が周辺の郊外よりも高くなる現象）の緩和
	大気汚染や騒音の低減	緑による大気汚染物質（粉塵や有害ガス等）の吸着 植栽帯の存在による騒音の低減
水質浄化	水質浄化	干潟や河川沿いの植生による栄養塩等の吸収による水質浄化
災害の緩和	水害の低減	緑地の持つ雨水の貯留・浸透機能による水害の低減
	延焼遅延・防止や防災・避難場所の確保	緑地の存在による火災発生時の延焼遅延や防止 公園等災害時における避難や防災拠点としての機能



写真 2-4 壁面緑化
（豊洲西小学校）

【出典】江東区「江東区みどりの基本計画（後期）」
（令和 7（2025）年 3 月）



写真 2-5 防災拠点の公園
（都立大島小松川公園）

【出典】アメニス東部地区グループウェブサイト
「TOKYO EAST PARK「大島小松川公園」」